

日本語イディオムの認知的研究

著者	庄司 明子
号	9
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第117 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59229

しょう じ あき こ 庄 司 明 子

学 位 の 種 類 博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号 国博 第 117 号

学位授与年月日 平成22年 9 月 1 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研 究 科 ・ 専 攻 東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)
国際文化交流論専攻

学 位 論 文 題 目 日本語イディオムの認知的研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授	小 野 尚 之	教 授	宮 本 正 夫
		准教授	ナロック ハイコ
		准教授	中 本 武 志
		教 授	川 平 芳 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日英語イディオムを認知言語学的立場から比較対照分析することを目的とする。認知言語学的立場とは、言語の意味を概念 (Lakoff and Johnson 1980) と捉える立場で、言語の意味は認識された外界をカテゴリー化 (categorization) したものであり、認識主体の主体的解釈 (subjective construal: Langacker. 1991) に基づいており、百科事典的知識 (encyclopedic knowledge) 体系との関わりの中で理解されるものであると考える立場である。また、語の意味がどうしてそのような構造を持つかについての動機付けを認識主体の認知的基盤に求める。

従来イディオムは大変凍結度の高いもの (Fraser. 1970) で、複数の語で構成されているが、通常の単語と同じように一つの意味を持つ語彙素 (lexeme) や語彙項目 (lexical item) と考えられていた (Crystal. 1987. 風間他監訳1992: 162)。しかしイディオムは内部修飾や受動化、代名詞照応、省略などの統語的生産性を見せることから、最近の研究ではイディオムの慣用的意味に対する話者の解釈は、イディオムの構成語並びに構成語の合成に動機づけられていると主張するものが増えて来ている (Nunberg et al. 1994, Gibbs. 1990, 1994, Gibbs and O'Brien. 1990)。

本研究では、イディオムの慣用的意味は構成語並びに構成語の合成に動機づけられ、構成語が単

独で持つ意味の総和以上のゲシュタルト構造をもつものであることを主張する。本研究では、日英語イディオムの語構成から、構成語の語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムと、語連結が変則で現実世界にない事柄を表している変則連結イディオムに分類しているが、構成的意味に動機づけられて慣用的意味を生成する認知的プロセスにおいて、それぞれの意味生成のタイプが異なることを示していく。さらに身体部位を含むイディオムの意味構造を分析し、構成語である身体部位が身体性を反映して特別なイメージ・スキーマを持ち、イディオム全体の意味生成に大きく貢献していることを示す。また、イディオムの慣用的意味は多くの場合、それ自体イメージ・スキーマであり、具体的な意味は文脈によって与えられることを示す。

本研究で注目するのは、日本語と英語という異なる言語に表れる人の認知操作の共通点、そして相違点である。日本語と英語では、音韻体系、統語構造、またそれを使用する話者の文化、歴史、習慣が非常に異なっている。そのように異なった言語間に見られる共通点はどのようなもので、相違点はどのようなものかを意味生成という観点で検証する。

本研究では、動詞（句）と名詞（句）を含む日英語イディオムを扱う。まず、イディオムを構成語の語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムと、構成語の語連結が変則で現実世界にない事柄を表している変則連結イディオムとに分類する。そして、イディオムの構成的意味（字義の意味）と慣用的意味がどのような繋がりを持ち、どのような認知プロセスに関与しているかを検証する。さらに、日英語の身体部位を含むイディオムにおいて、身体部位がどのような意味やスキーマを持ち、身体性がいかに意味に反映されてイディオム全体の意味の動機づけになっているかを検証し、日英語イディオムの共通点、相違点を考察する。

本研究の主張並びに結論は次のとおりである。

- (1) イディオムは全体で一つの意味をもつが、構成語とイディオム全体の意味の関係は恣意的に決められているのではなく、日英語イディオムでは、構成語が単独の時に持つ意味、並びにその総和に大きく動機づけられて慣用的意味の意味構築が行われ、それはもとの構成語が単独の時に持つ意味の総和以上のゲシュタルト的構造を成している。
- (2) 日英語イディオムの語構成を観察すると、構成語の語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムと、語連結が変則で現実世界にない事柄を表している変則連結イディオムに分類される。この2つのタイプのイディオムでは、構成的意味から慣用的意味への認知的プロセスにおいて、それぞれの意味生成のタイプが異なっている。語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムでは、イディオムの構成語が単独の時に持つ意味の総和とイディオムの慣用的意味との関係は、メタファーやメトニミーという認知操作に関与して意味生成が行われている。また語構成が変則な変

則連結イディオムでは、構成語の意味フレームは対立し、概念融合が起こる。そしてそれぞれのフレームから部分的に構造を受け継ぎ、新しい構造が創られて慣用的意味に繋がっている。

- (3) イディオムの意味解釈においてはイメージ・スキーマが大きな役割を果たしている。日英語の身体部位を含むイディオムにおいて、イディオムの意味は身体性を反映し、身体部位を表す語「足」、foot、leg は、「移動」、「基盤」など特定のスキーマを持ち、イディオム全体の意味構築の大きな動機づけとなっている。日本語では「踵」や「つま先」などの特定の部位を含む慣用句はなく、「足」ですべてを表している。一方、英語には heel、toe などを使ったものがあり、「強い意志」、「権力に対する服従」、「精神の集中」などのスキーマを持ってイディオム全体の意味に貢献している。日本語と英語ではイディオムにおいて身体部位の使い分けが異なっている。

またイディオムの慣用的意味は多くの場合、それ自体がイメージ・スキーマである。例えば、「薄氷を踏む」、「匙を投げる」などの慣用句の慣用的意味である「非常に危険な状況に身を置く様子」、「いくら相手のために努力しても無駄ではや救いようがないと見放す」(『故事ことわざ・慣用句辞典』1999三省堂) という内容は、抽象的構造でイメージ・スキーマであり、具体的な意味は使用される文脈によって与えられる。

- (4) ほぼ共通する自然環境と社会的環境に置かれている人間は、使用言語が異なっても、身体性に基づき、その認知操作には共通する部分があり、イディオムの意味構築にも普遍性がみられることが多い。佐々木 (1994) は人間は身体的能力を基盤に環境にアフォーダンスを模索するという。例えば、日英語イディオムの *hold the purse string* と「財布の紐を握る」、*close one's eyes to* と「目をつぶる」のそれぞれにおいて、構成的意味が同じ事態を表し、慣用的意味もそれぞれ「財政を預かる」、「(特に不都合なことに) 目をつぶる、～を見ないふりをする」(『研究社—ロングマンイディオム英和辞典』1989) という類似した意味であるのは、言語が異なっても我々を取り巻く環境が類似しており、身体的機能を基盤とする経験が言語に反映されているためである。

次に各章の概要を示す。

第一章 イディオム研究における問題の所在

本研究では日英語イディオムの意味分析を行うが、何をイディオムと考えるか、イディオムの構成語の意味とは何かという点については様々な考え方があり、見解の一致を見ていない。本章では、イディオムの定義についての先行研究を概観し、本研究で使用する用語についての定義を行う。「イディオム」、「構成語の意味」、「中核の意味」、「構成的意味 (構成義)」、「慣用的意味 (連合義)」、「自然連結イディオム」、「変則連結イディオム」、「(イメージ) スキーマ」などの用語について定義する。

本研究では、「イディオムとは複数の語連結が慣用的に使用されているもので、その全体の意味は慣用により決まっており、それは構成語が単独のときに持つ意味の総和になっていないもの」と考える。また、「構成語の意味」というのは、その語が単独の時持つ意味ということであるが、それは「中核的意味」(core meaning)を指すものとする。「中核的意味」とは、「ある語が解釈される際、最初にアクセスされるプロトタイプの意味」である。プロトタイプの意味は、「複数の意味のなかで最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、認知的際立ちが高く、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有する」。(松本2003: 142) また、イディオムの「字義的意味」(literal meaning)とは、文字通りの意味のことである。これは「構成語の中核的意味の合成」を指す。これを本研究では「構成的意味」または「構成義」と呼ぶことにする。次にイディオムの「慣用的意味」(conventional meaning)とは、イディオム全体が示す意味で、構成語の合成によりゲシュタルト的に生み出される意味のことで、本研究では「非構成的意味」、または「連合義」と呼ぶことにする。さらに本研究では、イディオムを「自然連結イディオム」(idioms of natural collocation)と「変則連結イディオム」(idioms of anomalous collocation)に分けている。「自然連結イディオム(慣用句)」とは、イディオムの構成的意味が解釈可能なもので、現実の世界にある事柄を表しているものをいう。それに対し、構成語の連結が語の選択制限に違反しており、自然な解釈が出来ないものを「変則連結イディオム(慣用句)」という。さらに、本研究では、語の「意味」に加えて、より抽象的な象徴構造である「スキーマ」という概念を使う。Johnson(1987. 菅野他訳1991: 26)はイメージ・スキーマについて、「身体運動、対象の操作、そして知覚的相互作用には、繰り返し現れる型が伴う...それらは主としてイメージの抽象的構造として機能する」と述べている。「スキーマ」とは、同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造をさす(辻2002: 124)。本研究での「スキーマ」に対する考え方を確認する。我々人間は、身体機能をもとに、自然環境、社会環境を含む現実世界の中で様々なことを経験し、その環境や経験の中から規則性を見つけ、抽象的なスキーマとして、脳内に保存している。「スキーマは環境の規則性を抽象的に表示するものである」(黒田・中本・野澤2005: 167)ので、我々の脳の中には沢山の抽象構造がスキーマとして存在し、それを様々なコンテキストで活性化させて、言語表現に反映させたり、意味解釈を行ったりしている。スキーマは決して特別なものではなく、我々の言語表現に頻繁に現れている、人間の概念の型である。どのような表現にどのようなスキーマが活性化されるのかは個々の事例による検証が必要である。本研究では第四章で、身体部位を表す言葉にどのような抽象的な概念、スキーマが活性化されているのかを検証する。

複数の語で構成され全体として一つの意味を持つイディオムは様々な特徴を持つ。イディオムの特徴として、「慣用性」、「合成性」、「ゲシュタルト的意味」、「統語的構成性」、「選択制限違反」に

ついて説明する。イディオムは慣用的に意味が決まっており、また話者の価値判断や感情的側面を表している。イディオムは、その全体の意味を構成語に割り当てることが出来るか否かを問題にする分解可能性と関連して、合成性の問題が論じられて来た。しかし、イディオムの慣用的意味は構成語に動機づけられているが、その合成以上のゲシュタルト的構造を持っている。また、イディオムは、受動化、内部修飾、代名詞照応、省略などの統語的操作の容認度が一様でなく、その可否は統語形式からは予測がつかない。庄司（2003）では、受動化の予測がイディオムの意味構造から可能であることを示している。また、イディオムはイディオムである限り、文脈の中で語の選択制限違反を犯している。例えば、「久しぶりに古い友人に会い、懐かしい話に花を咲かせた」という表現で、「花を咲かせる」とは「興を感じてにぎやかに話をする」（『故事ことわざ・慣用句辞典』三省堂）という慣用句である。しかし、ここで「花を咲かせる」を構成的意味、つまり「（植物の）花を（庭などに）咲かせる」という意味で解釈すると変則的で理解できない文となる。この文は「花を咲かせる」を慣用句として解釈して初めて意味が伝わるものとなる。「花を咲かせる」の語構成は自然で解釈可能であるので自然連結慣用句であるが、「話に花を咲かせる」という表現が変則になるのは、慣用句であるので、文脈の中では必然的に選択制限違反を犯しているからである。本研究では、イディオムを構成する語構成が自然なものを自然連結イディオム、その語構成が変則なものを変則連結イディオムと呼んでいる。これは文脈との不整合性から生じる選択制限違反とは異なるレベルの分類である。このように、イディオムは字義通りに解釈されると文脈においては常に選択制限違反を犯していることになる。

第二章 分析のための枠組み

本研究では日英語イディオムの意味構造について分析するが、第二章ではその基盤となる分析のための枠組みについて説明する。すなわち、言語表現に身体性が反映されていること、語の意味拡張に関連する「メタファー」、「メトニミー」、「シネクドキ」などの認知プロセスについて、さらに言語表現の背景にある「フレーム」、「スキーマ」、「スクリプト」などの概念について内容を確認する。そして本研究でイディオム分析に使用する Fauconnier (1997), Fauconnier & Turner (1998, 2002) のメンタル・スペース理論について概観する。

まず言語に身体性が反映されている点について述べる。使用する言語が異なっても、人間は一定の共通する身体機能を持ち、その身体機能は限られている。人間を取り巻く環境には、自然環境、社会環境があり、社会環境は、人間が社会の秩序を守るために意図的に作った、拘束力の強い制度や法律と、慣習や儀礼など心理的に束縛するものがある。そのような環境の中で、人間は、身体性を基盤として経験則に基づき、いろんな事象や事物を捉え、言語表現に反映している。佐々木 (1994) は、「椅子は座ることをアフォードするように作られている。椅子の本質は『座る』アフォー

ダンス (Gibson. 1979) である。すべての道具は何か特定なことをアフォードするようにつくられている。」という。また人間は、環境にある事象や事物を、主観的なパースペクティブで捉え、その視点を言語表現に反映させている。さらに、人間の身体と心は別々のものではなく、共起性を持っており、連動し、相互作用を行って、それを言語表現に反映させている。

言語の意味 (カテゴリー) にはプロトタイプと周辺的なものがあり、我々はこのプロトタイプの意味をメタファー、メトニミー、シネクドキによって周辺的な意味に拡張している。プロトタイプとは「複数の意味のなかで最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、認知的際立ちが高く、中立的なコンテキストで最も活性化されやすいといった特徴を有する」(松本 2003) ものである。

メタファーとは、2つの事物、概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物、概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩 (松本2003: 77) である。Lakoff (1987) は、メタファーを、類似性に基づき起点領域から異なる概念領域である目標領域への写像であると唱えている。さらに Lakoff (1990) では、「メタファー的写像はソース領域の認知トポロジー(つまり、イメージ・スキーマ構造)を維持する」(Lakoff. 1990. 坂原編24) と不変性仮説 (Invariance Hypothesis) を唱え、起点領域から目標領域へ写像されるのはイメージ・スキーマであると主張している。

メトニミーとは、2つの事物の外界における隣接性、さらに広く、2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩 (松本2003: 83) である。Langacker (1999) は、人はより把握しやすいものを参照点 (reference point) として捉える能力があると説明する。Langacker (1993) は「参照点構造」(reference point construction) を提唱し、人はあるものを理解する際、そのターゲットにアクセスするのが困難なとき、より注意を向けやすい参照的にまずアクセスし、参照点を經由してターゲットを理解するという心的操作が働いていることを示している。

シネクドキとは、より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩 (松本 2003: 79) であり、メタファーが拡張関係であるのに対し、シネクドキはスキーマ関係であるという (松本 2003: 171)。

山梨 (1988: 111) は「換喩や提喩に関わる言語現象の問題は、広い意味でメトニミーの問題として統括して考えることができる。日常言語を特徴づける推論のメカニズムの一部は、このメトニミー的な推論にもとづいている。」として、メトニミーが換喩と提喩を統括できるものとして捉えることが出来ることを示している。本研究ではシネクドキをメトニミーと統括して捉えるものとしている。

次に、スキーマ、フレーム、スクリプトについて説明する。我々人間は、身体機能をもとに、自然環境、社会環境を含む現実世界の中で様々なことを経験し、その環境や経験の中から規則性を見

つけ、抽象的なスキーマとして、脳内に保存している。スキーマとは、同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造をさす（辻2002: 124）。またフレームとはある語を理解するのに前提となる世界的知識のことをいう。河上（1996: 39）は、フレームについて、「私たちはいわゆる典型的（ステレオタイプのな）状況の連続を記憶の中に保持しており、それに関係する語に遭遇したとき常に背景にその『保持された枠組み』を喚起する。これがフレームと言われるものである」と説明する。つまり、ある語の言語的意味だけでなく、その語に関係する百科事典的知識を喚起する。それがフレームである。スクリプトは、「フレームと同じように、経験から抽出された、推論や解釈の元となる具体的な知識の集まったパターンのことを言うが、スクリプトの場合、特に時系列に沿った具体性の高い一連の出来事を言う」（辻2002:125）。

本研究では Fauconnier（1997）の提唱する「メンタル・スペース理論」における「概念融合」の考え方をイディオム分析に使用する。Fauconnier（1997: 1 坂原他訳1）は、「...意味を作り出し、相手に伝え、処理するのは人間だけが持つ認知能力であるが、領域間マッピングはその中心にある。」「言語表現 E はそれ自身で意味を持っていない。言語表現が持っているのは意味ポテンシャル（meaning potential）であり、意味は、完全な談話と文脈の中で始めて実際に作られるのである。」（ibid: 37 坂原他訳47）「...マッピングの機能は、メンタル・スペース（mental space）を作り、リンクすることである。メンタル・スペース（Fauconnier, 1994）とは思考、会話の進行につれて次々に増えていく部分構造である」（ibid: 11 坂原他訳14）「...メンタル・スペースはフレームや認知モデルによって内部構造を与えられる」（ibid: 39 坂原他訳48）と説明し、独自のメンタル・スペース理論を提唱している。マッピングは次のように行われる。2つの入力スペースの間で対応物の部分的マッピングが行われる。総称スペースには2つの入力スペースが共有する、より抽象的な構造がマップされる。入力スペースは融合スペースに部分的に投射され、概念融合（conceptual blending）が起こり、合成（composition）、完成（completion）、精緻化（elaboration）によって新しい創発構造（emergent structure）が作られる。本研究における変則連結タイプは概念融合によって説明される。

第三章 日英語イディオムの意味タイプ

本章では、イディオムの慣用的意味（連合義）が構成的意味（構成義）に動機づけられてゲシュタルト的意味を成しているという考えに基づき、日英語イディオムの構成義と連合義の関係を考察し、イディオムの連合義がどのように構成語並びに構成義に動機づけられているかを検証する。

本研究では、日英語イディオムの語構成から、構成語の語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムと、語連結が変則で現実世界にない事柄を表している変則連結イディオムに分類している

自然連結タイプは、構成義と連合義の関係から3つのタイプに分けられる。1つ目のタイプは、構成義が表す事柄との類似性からイメージ・スキーマが他領域に写像されて連合義につながっているメタファー写像に関与するもの、2つ目は、構成義の表す内容が同じ領域の別の事柄を表しており、構成義と連合義が全体と部分の関係にあるメトニミーに関与しているもの、そして3つ目のタイプは、構成義からメトニミー、メタファーの両方に関与して連合義につながっているものである。その意味生成のプロセスを、メタファーについては Lakoff & Johnson (1980)、Lakoff (1987)、Lakoff (1990) のメタファー論、メトニミーについては Langacker (1993) の参照点構造に関する理論に基づき検証する。

メタファーに関与するものとしては、*skate on thin ice*、*add fuel to the fire*、*upset the apple-cart*、「足並みがそろろう」、「脂が乗る」、「灰汁が強い」などがある。メトニミーに関与するものとしては、*raise an eyebrow*、*bend the knee*、*let one's hair down*、「看板をおろす」、「顔をみせる」、「筆をとる」などがある。また、メトニミーとメタファーの両方に関与するものとして、*throw in the towel*、*bury the hatchet*、*set the cat among the pigeons*、「匙を投げる」、「骨が折れる」などがある。

変則連結タイプは、語構成が変則で、意味の選択制限違反を犯しており、現実には無い事柄を表している。また、語構成が変則であるので新しい創造的な関係を作りだしている。従って、構成義の表す事柄が類似性から他領域に写像されたり、同じ領域の別の事柄を表しているという認知プロセスでは説明が難しい。構成語のフレームの対立 (clash) が起きて、それぞれのフレームが部分的に融合スペースに投射され、概念融合 (blend) が起こり、新しいゲシュタルト構造である創発構造が出来ると説明する Fauconnier (1997)、Fauconnier & Turner (1998)、Fauconnier & Turner (2002) のメンタル・スペース理論に基づき分析を行う。

変則連結タイプとしては、*bring a storm about one's ears*、*plough the sand*、*sweat blood*、「顔が売れる」、「膝が笑う」、「鯖を読む」などがある。具体的なそれぞれのイディオムについて、意味構造の分析を行っている。

第四章 日英語身体部位を含むイディオム

第四章では、日英語身体部位を含むイディオムにおいて、身体部位を表す語がどのような意味やスキーマを持ち、イディオム全体の意味構築に貢献しているかを検証する。

本研究で扱うのはイディオムである。イディオムは ad hoc な表現と異なり、日常生活の中で、長く繰り返し使われてきた慣用表現である。従って、イディオムの中で使われている身体部位には、その言語を使用する人間の、慣用化された、定着した意味やイメージ・スキーマが託されていると予測される。

本章では身体部位の「足」、foot、leg、heel、toe を含む日英語イディオムについて、身体部位に

含まれるスキーマという視点で分析を行う。構成語がイディオム全体の意味にどのように貢献しているかを見るために、まずイディオムの構成的意味が、語連結が自然で解釈可能な自然連結イディオムであるか、語連結が変則で語の選択制限違反を犯している変則連結イディオムであるかを区別する。次に、イディオムの構成義（構成的意味）と連合義（慣用的意味）の関係について検証する。さらに構成語である身体部位が特別な意味やスキーマを持っているかを検証し、日本語と英語のイディオムにおいて普遍性があるか、相違しているかを考察する。

結論は次の通りである。身体部位は、我々の日常生活の経験の中で、いろんな機能を果たしているが、それに関連して身体部位を表す語は特定のスキーマを持ってイディオムの意味生成に貢献している。身体部位「足」、foot、leg は、人が「歩く、走る、(目的地に) 行く」などの「移動の手段」となっていることから、「足」、foot、leg が「移動のスキーマ」を付与されて、イディオムの意味の動機付けとなっているものがある。また、人は「足」、foot、leg によって大地に立つことが出来る。「足」、foot、leg が無ければ立つことは出来ないことから、「基盤のスキーマ」を付与され、イディオムの意味構築に大きく貢献しているものがある。また、heel、toe は足の中でより狭い範囲を示し、より特定された意味やスキーマを付与されている。heel は「権力に対する服従」、「強い意志・主張」のスキーマを持ち、toe は「弱い所、痛いところ」で、「神経・精神の集中」のスキーマを付与されている日本語慣用句において、「足」という語は、「太腿の付け根以下の足」全体を表し、特に慣用句において、広い範囲の「足」に含まれる「かかと」や「足先」、「くるぶし以下の部分」などの意味の区別はない。「足」という語ですべてを表している。それに対し、英語においては、機能の重複はあるものの、foot、leg、heel、toe はそれぞれ意味やスキーマの範囲を持っている。日本語慣用句の「足」と英語イディオムにおける foot、leg、heel、toe は語彙の使い分けが異なっている。

このように、身体部位の「足」、foot、leg、heel、toe が身体部位の特定の部分を意味するだけでなく、役割や機能によって特定のスキーマを付与され、イディオムの意味構築の大きな動機づけになり、イディオム全体の意味を豊かなものにしている。このことは、「足」、foot、leg、heel、toe という語に身体性が反映されていることになる。すなわち、我々はこれらの身体部位を表す語に、我々の身体を基盤にした日常生活の経験を反映させているのである。

第五章 まとめ

まとめとして「ゲシュタルト的意味」、「イメージ・スキーマ」、「身体性」、「日英語イディオム比較」について述べる。

従来、イディオムは非合成的なものであり、その意味は恣意的で慣用的に決められていると考えられていた。日本語である動物を「犬」と呼び、英語で dog と呼ぶことは恣意性に基づいている。つまり「犬」や dog とその動物の間には、そのような名付けにならなければならない理由は存在

しない。それと同様に、あるイディオムの語構成と意味の関係は恣意的なものであると考えられていた（『大修館英語学辞典』池上嘉彦他編1983）しかし、イディオムは複数の語から構成され、構成語はそれぞれ意味を持っている。イディオムの構成語とイディオム全体の慣用的意味の関係を観察すると、イディオムは内部構造を持ち、構成語の意味やスキーマに動機づけられゲシュタルト的意味を生成していることがわかる。

イディオムの構成義はメタファーやメトニミーに関与したり、フレームの対立（clash）による概念融合によって連合義の意味生成に繋がっている。構成義から連合義に繋がる認知プロセスでは、イメージ・スキーマが新しい意味構築において大きな役割を果たす。

我々は、日常生活の中で経験の中からいろんな規則を見出し、抽象的なイメージ・スキーマとして脳内に保存している。日英語イディオムにおいてもそのようなイメージ・スキーマが意味拡張に利用されている。身体部位「足」、foot、leg、heel、toeを含むイディオムでは、「足」、foot、legは「移動の手段」に使われることから「移動のスキーマ」を持ち、また「大地にしっかり立つ」時に重要な役割を果たすことから「基盤のスキーマ」を持ってイディオム全体の意味構築の大きな動機づけとなっている。さらに、legは脚力から転じて「能力のスキーマ」も持ち、heelは「権力に対する服従のスキーマ」、「強い意志・主張のスキーマ」、toeは「精神の集中のスキーマ」を持つ。このようなイメージ・スキーマが日英語イディオムにおける身体部位に付与されていることは、我々が、身体的機能に基づいて、「足」、foot、leg、heel、toeに関連する知識や経験を言語活動に反映させていることを示している。

さらに、多くのイディオムの慣用的意味（連合義）はそれ自体イメージ・スキーマである。イディオムの意味は慣用的に決まっているが、実際の意味は文脈によって与えられる。

第三章では、日英語イディオムの語構成のタイプを自然連結タイプ、変則連結タイプに分け、構成義と連合義の関係を見た。第四章では、身体部位の「足」、foot、leg、heel、toeがどのような意味やスキーマを持ち、イディオム全体の意味構築に貢献しているかを見た。この中で、イディオムの意味構築には身体性が反映され、普遍性が認められる点があることを示した。イディオムの構成的意味が、我々の身体的能力に基づく経験に関係する事態を表しているものは日英語で共通する認知プロセスが確認される。

日英語イディオムの構成的意味と慣用的意味の関係を検証すると、意味解釈に対する人の認知プロセスの普遍性が観察される。

参考文献

- Crystal, David. 1987. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge University Press. (風間喜代三・長谷川欣佑監訳1992『言語学百科事典』大修館書店)
- Fauconnier, Gilles. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge University Press. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博訳1996.『メンタル・スペース』白水社)
- Fauconnier, Gilles. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge University Press. (坂原茂・田窪行則・三藤博訳2000『思考と言語におけるマッピング：メンタル・スペース理論の意味構築モデル』岩波書店)
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 1998. "Conceptual Integration Networks" *Cognitive Science* Vol. 22 (2) : 133-187.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. Basic Books.
- Fraser, Bruce. 1970. "Idioms within a Transformational Grammar". *Foundation of Language* 6: 22-42
- Gibbs, Raymond. W. Jr. 1990. "Psycholinguistic Studies on the Conceptual Basis of Idiomaticity", *Cognitive Linguistics* 1-4: 417-451.
- Gibbs, Raymond. W. Jr. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press. (辻幸夫・井上逸兵監訳2008『比喩と認知：心とことばの認知科学』研究社)
- Gibbs, R. W., Jr. and J. O'Brien. 1990. "Idioms and Mental Imagery: The Metaphorical Motivation for Idiomatic Meaning". *Cognition* 46:35-68.
- Gibson, J. J. 1979: *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳1991『心のなかの身体：想像力へのパラダイム変換』紀伊國屋書店)
- 河上誓作1996『認知言語学の基礎』研究社
- 黒田航・中本敬子・野澤元2005「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」山梨正明他編『認知言語学論考』No. 4 2004: 133-269. ひつじ書房
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. University of Chicago Press. (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳1986『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What categories Reveal about the*

Mind. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳1993『認知意味論：言語から見た人間の心』紀伊國屋書店)

Lakoff, George. 1990. "The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-Schemas?" *Cognitive Linguistics* 1: 39-74. (杉本孝司訳「不変性仮説：推象理論はイメージ・スキーマに基づくか？」坂原茂編 2000.『認知言語学の発展』1-59. ひつじ書房)

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundation of cognitive grammar*, Vol. 2: *Descriptive application*. Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Construction". *Cognitive Linguistics* 4: 1-38

Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.

松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編1983『大修館英語学辞典』大修館書店

松本曜2003『認知意味論』大修館書店

Nunberg, Geoffrey, Ivan. A. Sag and T. Wasow. 1994. "Idioms". *Language* Vol. 70 (3) : 491-538.

佐々木正人 1994『アフォーダンスー新しい認知の理論』岩波書店

庄司明子2002「英語イディオムの意味と受動化についての一考察」東北大学国際文化研究科 修士論文

瀬戸賢一「意味のレトリック」1997中右実編『文化と発想のレトリック』94-177 研究社出版

谷口一美2003『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』研究社

辻幸夫 2002『認知言語学キーワード事典』研究社

山梨正明1988『比喩と理解』東京大学出版会

辞書・辞典

『研究社一ロングマンイディオム英和辞典』1989 東信行・諏訪部仁訳編 研究社

『故事ことわざ・慣用句辞典』1999 三省堂

論文審査の結果の要旨

本研究は、認知言語学的なアプローチによって日本語と英語のイディオム（慣用表現）の分析を行い、イディオムの意味を構成するしくみを明らかにしようと試みた論文である。従来イディオムは、構成語の組み合わせが慣用的に決まっていて、形式と意味の結びつきは一般の単語と同じよう

に恣意的であると考えられてきた。しかし本論文は、イディオムには内部的な構造が認められ、意味の構成原理が働くことを主張している。この意味構成は、認知言語学の理論的なモデルによってはじめて明らかにされるものであり、メタファーやメトニミー、イメージスキーマといった認知言語学における主要な概念が、イディオムの意味構成を説明する際どれほど有効かという点が示されている。

本論文の学術的な意義は、日英語イディオムの豊富な例にもとづいて、イディオムの構成的意味と慣用的意味（連合義）の関係を詳しく分析したことにある。本論文によると、多くのイディオムの慣用的意味は構成的意味に動機づけられ、メタファーやメトニミー、フレームの概念融合などの認知操作によって説明される。このような主張は、一般的な語彙意味論の観点から見ても独創性が認められる。さらに本論文では、日本語と英語という異なった言語におけるイディオムの対照分析を行ったが、言語が異なるにも係らず、同じ身体部位に言及するイディオムでは語の持つスキーマや構成義と連合義の関係など多くの普遍性を認めることができるという結論に至っている。このことは、言語によって慣用的に意味が決まっていると考えられるイディオムが、実は言語普遍的な基盤に立って意味を構成している可能性を明らかにしたものと見なすことができる。

本論文は日本語と英語の豊富な実例にもとづいて、イディオムの普遍的な意味構成を求めた点、および、認知言語学の概念や理論的なモデルを言語分析に用いる可能性を実証的に示した点が高く評価される。一方で、現象の説明が記述レベルで終わっている点をこの論文の弱点として指摘する声もあった。しかし、総合的に判断すれば、執筆者は、認知言語学の理論を十分に理解し、言語データの収集から分析に至る方法論を習得していると言える。したがって、本論文は、執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。